

「蘭学」を腑分けする

大島, 明秀
熊本県立大学

<https://hdl.handle.net/2324/1931501>

出版情報 : 2017-04-01. 溪水社
バージョン :
権利関係 :

「蘭学」を腑分けする

はじめに

大島 明秀

歴史学によって解明される〈事実〉とは何だろうか。

この問いを突きつけられた時、私たちははじめて、歴史学が過去の実態究明でありながら、その一方で、各研究が成された時点のアイデンティティが色濃く投影されている営為でもあることに気付くことができる。

かかる意味合いにおいて、「近世」をめぐる言説は、「近代」以降を探求する上で恰好の歴史史料である。近世日本の象徴的な概念とされてきた「鎖国」、「開国」概念はその好例で、これらをめぐる言説は、〈近代日本人〉のアイデンティティと密接に関わるものであったことは、もはや自明のところとなった¹⁾。そして、この地平の延長線上には、「蘭学」(洋学)をめぐる言説も所在している²⁾。

以上の問題意識を契機として、本稿では実態論と言説論の二つの切り口から、実験的に「蘭学」の腑分けを試みたい。

一 板沢武雄の腑分け

昭和八年（一九三三）、「蘭学」研究の第一人者であった板沢武雄は「岩波講座日本歴史」シリーズの一環として『蘭学の発達』を上梓した。本書は随所に画期的な試みが盛り込まれた意欲作であるが、特に注目すべきは、「蘭学」とは何かという問題について、先駆的に整理分析を行った点にある。以下、板沢武雄『蘭学の発達』を読み解きながら、その視座を浮き彫りにする。

まず、冒頭には、本書執筆の意図が記されている。

講座に於いて私の企図するところは、江戸時代に日本人がオランダ人若くはオランダ語を通じて、西洋の学術を如何に摂取したか、如何にそれを研究したか、如何にそれを応用したか、そしてその西洋学術が我が国史の進展過程に如何なる役割を演じたか、如何なる意義を有するものであるかといふことを略述するにある。ここに所謂西洋学術とは、その内容から見て、もつと適切に謂ふならば西洋の科学であるから、蘭学発達史は日本科学史の主要なる部分を占めるわけになるが、私はどこまでも独立的なものとしないうで、国史研究の一分野として、又は一観点として、蘭学の発達を取扱って見るつもりである³

ここから分かるのは、板沢が西洋学術（蘭学）を「科学」と限定的に見ていることと、「蘭学」が国史学研究の中に位置づけられてこなかったことである。特に後者の反省を踏まえて本書を成した板沢が最初に着手したのは、近世における「西洋の学術およびその研究の名称」についての整理であった。

板沢は、はじめに南蛮時代の西洋学術に着目し、これを「南蛮学、略して蛮学、又蕃学に作る」とし、齎された

学術については、神学、医学、天文学、地理学、印刷術、画法を挙げている⁴。

次に近世中期頃から登場した名称として「和蘭学、略して蘭学」を掲げる。板沢によれば、「蛮学」から「蘭学」への移行はただに名辞上の変更にとどまらず、担い手が通詞（の副業）から専門家に变化したことが重要であり、ここにおいてはじめて「独立した本格純正の学問として成立するに至った」のである。さらにそれは、「実質的の更新、内容と学的態度の更新、学会に於ける新旗幟の樹立を意味」するものであった⁵。

続いて幕末に広く用いられた名称として「西洋学、略して洋学」を挙げる。「この洋学は蘭学と同じやうな心もちで用ゐられたものではあつたが、和蘭語学から仏蘭語・英語・魯語と、だん／＼新しい語学研究が派生発達し、蘭学者の研究の範囲が拡大されてから用ゐ出されたやうに思はれる」としている⁶。

最後に一般的な呼称として「泰西学、略して西学」を紹介しているが、これは「洋学」と同様であると簡単に片付けている⁷。

以上の整理によつて各時代の名称とその特色が明らかにされたが、積極的にその意義が語られているのは「蘭学」時代のみであることから、板沢が本書の主題でもある「蘭学」にいかに関心を入れているかが容易に読み取れる。

ついで板沢が言及したのは、「蘭学の発達」を検討する際の分析視点であったが、地理的視点（長崎、江戸、京畿、諸藩）、政治的視点（官学系統、私学系統）、発達の視点（医学本草学、天文曆学、兵学）と三つの研究視座を挙げるものの、冒頭に記した見地から論を進めることを再確認して「序説」は締め括られる⁸。

その後板沢は、近世における日蘭交流の様相や、各地における「蘭学」の普及展開を概観した上で、第三章第四節「蘭学の内容と研究方法」では、発展史的視点から「蘭学」の分野について改めてまとめをおす。ここで板沢は「蘭学はオランダ語によりて摂取した西洋の科学」と見ており、その主流は、（一）医学・本草学、（二）天文学・曆学、（三）兵学の三分野であったと説いている⁹。

本書の最終章である「蘭学の影響」では、「蘭学の我が国思想界に及ぼせる影響は多方面であつた」としながらも、板沢はとりわけ「世界観」、「日本人が自国以外の世界的認識をいかにして深めて来たか」という問題に着目し、これらを(一)神話に現れた上代の世界観、(二)本朝、震旦、天竺の三国世界観、(三)「蛮学」によって齎された真正なる世界観、と発展的に三段階に区分し、ここで「江戸時代蘭学の興隆」が「真正なる世界観」を「いよく確実深遠なものにした」と唱えるのである。さらには、「蘭学」が「国民的自覚と世界観(世界的自覚)」を「啓発喚起」し、「幕末維新の大転回期に啓蒙的の寄与をなした」とする見解まで提示している¹⁰⁾。

以上、板沢武雄の分析を見てきたが、ここから少なくとも以下の四点が読み取れよう。一点目は、社会進化論的な歴史観に基づいていること。二点目は、「蘭学」を(実用的)な「西洋科学」に限定していること。三点目は、「蘭学」を(先進的)なものとして眼差していること。四点目は、日本の(近代化)に対する貢献という視点から「蘭学」を位置づけていることである。

それにしても、これらの視線(言説)がひとり板沢のみにとどまらず、多かれ少なかれ現在の「蘭学」(「洋学」)研究にも継承されていることを改めて痛感させられる。

二 解体される「蘭学」

日蘭学術交流の初期において、「蘭学」は主に阿蘭陀通詞を中心とした長崎の関係者間で行われたが、その最要人物の一人向井元升(一六〇九〜七七)の学問の在り方は、「蘭学」の実態と言説を考察する上で示唆に富んでいる。文政二年(一八一九)に江戸で板行された『先民伝』によると、元升は長崎で林吉右衛門に南蛮天文学を学んだ

一方で、「儒医」としてその名が聞こえたよう¹¹⁾だ。寛永一六年(一六三九)には書物改に加わり、また、正保四年(一六四七)には長崎奉行馬場三郎左衛門から土地を与えられて聖堂を開設し、その傍ら慶安年間には輔仁堂という私塾を建てた。元升の著作には『孝経辞伝』(二六七二刊)などの儒教関連書や、神道思想に基づきキリスト教や仏教(特に黄檗宗)を批判した「知耻編」(一六五五成)、或いは『庖厨備用倭名本草』(一六七一成、一六八四刊)ならびに「医門関」といった医学・本草学関係書が確認でき、かかる仕事から「儒医」としての元升の一端を窺うことが可能であろう¹²⁾。

しかしながら、向井元升という人物が何より興味深いのは、「儒医」を越える活動を行った点にある。一七世紀の前半から中盤にかけて、大目付井上筑後守政重(一五八五〜一六六一)は支配体制の安定化を見据え、積極的に西洋の有用な科学技術の移転に取り組んでいたが、元升はとりわけ医学、天文学の分野で貢献した¹³⁾。

ことに医学の側面から一七世紀の日蘭交流史に数々の刺激的な知見を齎しているヴォルフガング・ミヒェルによれば、現存する「阿蘭陀伝外科類方」、「阿蘭陀外科医方」、「証治指南」といった諸写本から、明暦・万治年間(一六五五〜六〇)頃に元升が成した医書の原型に遡ることができる。井上筑後守の要請を背景に、オランダ商館の外科医ハンス・ユリアン・ハンケ(Hans Juriaen Hacke)から元升が導入、作成したこれらの医学書の特徴は、中国医学の知識と突き合わせて分析消化し、批判的に受容した点にある。いわば漢蘭折衷の「蘭学」であった。特に「癰疽」(悪性の腫れ物)の扱いはその典型といえ、本項目はハンケの学説ではなく、主に明代の医師陳実功『外科正宗』(一六一七)に基づいている¹⁴⁾。

西洋の学問を遠慮なく「解体」した背景には、元升が思想の基盤に儒学を置いていたことから、中国を「華」とし西洋を「夷」とする「華夷思想」の中で世界を理解していたことが考えられるが、ただし、元升の思想は単に「華夷思想」のみで表現することが不可能なほど、儒教に加えて神道を基盤とした強烈な日本中心主義的思考も持ち合

わけていたことには留意せねばならない。

いずれにせよ、ここで見えてくるのは、元升の「蛮学に憚り無し」との自負からも分かるように、西洋の学術を盲目的に信奉するのではなく、主体的な判断の元に取捨選択しながらそれを取り入れた姿勢である。¹⁹⁾

ところで、「北条流兵学」の祖・氏長(二六〇九〜七〇)が作成したいわゆる「由里安牟攻城伝」も刮目すべき史料である。これは、慶安二年(二六四九)に来日していた臼砲手ユリアン・シェーデル(Jurjan Schedel)に、機会を得た氏長がヨーロッパの攻城の方法を尋ね、研究した成果と見られる。少し前の時代には「嶋原天草一揆」(一六三七〜三八)があり、それを契機として幕府は臼砲の導入を検討したが、その動向に反するように、「由里安牟攻城伝」やその他の北条流文書からは、氏長が西洋の砲術に熱意を示した様子は見られない。²⁰⁾

勿論、一七世紀に西洋から伝わった医学・本草学などの多くは「解体」されることなく内容を「忠実」に伝えたものであるが、しかしここで注意したいのは、向井元升のように、西洋の学問を批判的に検証しながら主体的に再構築した「蘭学」が、個別事例ではあっても、この時期に確かに確認できることである。²¹⁾

三 「西夷視」される「蘭学」

一七世紀中盤までにキリスト教の禁制を軸とする近世の対外関係の基本線が整い始めたが、爾後、西洋の学問は、キリスト教関連であるとの疑いを免れた書物や情報、或いは規制の網をすり抜けた漢訳洋書を通じて受容された。

八代将軍徳川吉宗(一六八四〜一七五二)は、享保五年(一七二〇)に漢訳洋書の制限や、洋式馬術・馬医学に関心を寄せたこと、或いは青木昆陽(二六九八〜一七六九)や野呂元丈(二六九四〜一七六一)といった「蘭学者」を

輩出したことで周知される。ただし、彼らの「蘭学」は、基本的にオランダ語学書の作成や、本草・博物書の内容を「忠実」に伝えることを意図していた。

また、エンゲルベルト・ケンペル(Engelbert Kaempfer, 1651-1716)の助手を務め、ジョバンニ・パティスタ・シドッティ(Giovanni Battista Sidotti, 1668-1714)の尋問にあたったことと著名な阿蘭陀通詞今村源右衛門英生(市兵衛, 一六七一〜一七三六)の写本「西説伯楽必携」は、前述の吉宗の洋馬に対する関心を背景として作成された文献であるが、本書もまた、ピーター・アルマヌス・ファン・クール(Pieter Almannus van Coer)の蘭書や調馬師ハンス・ユルゲン・ケイゼル(Hans Jurgen Keijser, 1697-1735)との質疑応答で得られた成果などに基づいて、西洋式の馬術、馬療、飼育法などを「忠実」に伝えることを意図した「蘭学」と言える。²²⁾

かかる状況の中、一八世紀後半あたりから、幕府の政策が関与しないレヴェルでも、オランダ語・文法学書や医学書をはじめとした輸入蘭書を直接翻訳する人々が出現し、「蘭学」、「蘭学者」という称が本格的に普及していく。

ここで、目下最も人口に膾炙している「蘭学書」とは何かを考えてみると、おそらく杉田玄白(一七三三〜一八一七)、前野良沢(一七二三〜一八〇三)らによって翻訳された『解体新書』(二七七四刊)の名が挙がるであろう。前章に見たように、長崎における西洋学術が「江戸蘭学」より遥かに先行するものの、本書はしばしば「蘭学」の嚆矢と称される。²³⁾ただし、向井元升や阿蘭陀通詞の「蘭学」が一部のものに留まったのに対し、『解体新書』が版本として江戸で出版された点を勘案すると、「蘭学」の「認知」、「普及」、「共有」などの面で一定の影響があったことは否めない。

ところで、『解体新書』には、長崎の阿蘭陀通詞吉雄耕牛(一七二四〜一八〇〇)が序を寄せており、冒頭から「阿蘭之國精乎技術也。凡人之彈心力尽智巧尽而所為者。宇宙無出于其右者也」(阿蘭の国は技術に精なり。凡そ人の心を盡し智巧を尽してなす所の者は、宇宙にその右に出づる者なきなり)との賛辞が見られる。しかし一方で、「今而後。

我 東方之人。始知蘭人之精於医。大有益乎人也」(今にして後、我が 東方の人、始めて蘭人の医に精にして、大いに人に益あることを知らん)との言から、「蘭学」の意義が世間に認知されていない当時の様子が読み取れる。

同時期の「蘭学書」として『蘭学階梯』(二七八八刊)も注目しに値する書物である。本書は、仙台藩医大槻玄沢(一七五七〜一八二七)が初学者用に「蘭学」の概要を説明したいわば入門書で、内容もさることながら、序跋に著名な「蘭学者」がその名を連ねている点でも興味深い文献である。

最初に福知山藩主朽木昌綱(一七五〇〜一八〇二)が叙を寄せている。そこでは中国と「漢学」に批判的な眼差しを投げかけながら、「天地人才、果什百於支那諸説」(天地人才、果たして支那の諸説に什百なり)と評し、「蘭学」が「漢学」より優れていることを主張している。続いて松江藩士萩野鳩谷(一七二七〜一八一七)による別序が付されているが、中国と「漢学」を相対化しながら「蘭学」の意義を強調する点で、朽木昌綱叙と論旨が同様である。

津山藩医宇田川玄随(一七五五〜一七九七)による跋は、銜学的な文章による「蘭学階梯」の賛であるが、最後に寄せられた幕府の奥医師桂川甫周国瑞(一七五四〜一八〇九)の跋は興味深い。「蘭学」を「々」「有」用之学莫如焉(「有用の学はこれにしくはなし)と賛美しながらも、「亦何西夷視乎哉」(また何ぞ西夷視せんや)と締め括る。ここから、いまだ「華夷思想」が色濃く存在し、「蘭学」が「西夷視」されていた時代であったことを窺わせる。

以上の史料から読み取れることは、一八世紀後半の「蘭学者」の目指すところが「蘭学(者)」の地位向上にあり、そのために「華」である「漢学」の相対化を行いながら、「夷」である「蘭学」の意義を積極的に説いた様子である。

四 浸透する「蘭学」

一八世紀末に行われたいわゆる「寛政の改暦」は、前章で見えてきたような流れを一変させるような事件であったと見ることが出来る。この改暦にあたって幕府は、高橋至時(一七六四〜一八〇四)と間重富(一七五六〜一八一六)を起用し、念願であった西洋天文学を取り入れた暦を完成させ、これを寛政一〇年(一七九八)から施行した。その前に行われたいわゆる「宝暦の改暦」が、西洋天文学を取り入れることを企画しながらも挫折したことを勘案すると、「寛政の改暦」は「幕府政治」、「暦(学)」といった二つの権威的なレヴェルで、「蘭学」の或る種の「権威化」が達成された事件であったと言える。

加えて、寛政一二年から文化一三年(一八〇〇〜一六)にかけて行われた伊能忠敬(一七四五〜一八一八)による全国測量や、文化八年(一八一二)に洋書翻訳のための機関「蕃(蛮)書和解御用」が天文方内に設置されたことは、「蘭学」の「権威化」をさらに裏打ちする事件であっただろう。

ところで、板沢武雄が言及したように、一九世紀の「蘭学」は確かに(一)医学・本草学、(二)天文・暦学、(三)兵学の三分野、ならびにそれに関連する諸科学、を柱としていたが、これら「実用科学」にとどまらない「蘭学」も出現する。

一例を挙げると、ケンペル原著、志筑忠雄(一七六〇〜一八〇六)訳「鎖国論」写本(一八〇一成)は、平田派国学者をはじめとして大いに普及したが、基本的に自己像の再確認以上の用いられ方はせず、「実用科学」とはほど遠い文献であった。また、嘉永元年(一八四八)頃に成立したと考えられる黒田勘盧訳「漂荒紀事」写本は、イギ

リスの文学者ダニエル・デフォー (Daniel Defoe: 1660-1731) の漂流記『ロビンソン・クルーソー』(初版は一七一九刊)の抄訳である。個別事例ではあるが、このように一九世紀における「蘭学」の多様性が確認できる。

また、医学、兵学に関する蘭書は大いに輸入されたが、幕末に至るまで解剖学の進展は極端に鈍く、また、兵器や五〇〇石以上の軍用船の輸入や製造、築城なども厳禁されていた。これらの事例は、「実用科学」の蘭書、或いは「蘭学」を、すぐさま〈有用〉、〈先進〉の眼差しをもって見つめることの危険性を示している。

さて、前世紀後半には「蘭学」の周知と地位向上が深刻な課題であったが、一九世紀に入ると、オランダ人や「蘭学」に対する言動に、「崇拜」と形容しうるような受容の在り方が登場する。例えば、中津藩五代藩主奥平昌高(一七八一〜一八五五)は、その好例である。昌高の「蘭学」への熱意がよく表れているのは、とりわけ二種の日蘭対訳辞書の編纂事業であろう。文化七年(一八一〇)、家臣の神谷源内に命じて国内初の日蘭対訳辞書『蘭語訳撰』を編纂させ、また、文政五年(一八二二)には近習医大江春塘(一七八七〜一八四四)にローデウエイク・メイエル『語彙宝函』(Lodewijk Meijer: 1629-1681: Woordenschat)の第一部を刊行させた。

しかしながら、昌高の「蘭学」に対する熱意はこれにとどまるものではなかった。オランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフ(Hendrik Doeff: 1777-1835)との交流の中で、昌高はドゥーフにオランダ名の授与を要求し、フレデリック・ヘンドリック(Frederik Hendrik)という名を付され、欣喜雀躍するのである。オランダ人に要求して蘭名を授かる営為は、昌高とその家族、および家臣のみならず、各地で行われていた。その状況は、ドゥーフの後任者ヤン・コック・ブロムホフ(Jan Cock Blomhoff: 1779-1863)をして「こんなことが今や当地では大流行となつてゐる」(Hetwelck thans alhier een rage word)と言わしめるほどであった。

オランダ人や「蘭学」に関わる人々の間でかかる潮流が巻き起こる中、一部の「仏教者」や「国学者」の反応は極めて批判的であった。西洋天文学に対する反発と仏教陣営の復権の意図から『仏国曆象編』(一八一〇序)を刊行

し、いわゆる「梵曆運動」を巻き起こした無外子釈円通(一七五四〜一八三四)などはその典型であるが、嘉永三年(一八五〇)に『異人恐怖伝』を上梓した忍藩士黒沢翁満(一七九五〜一八五九)もその好例である。

『異人恐怖伝』は、写本で作成された上述のケンペル原著、志筑忠雄訳「鎖国論」を翁満が改題した上で前編二巻とし、後編に自身の見解「刻異人恐怖伝論」一巻を付して板行した文献である。そこには、以下のように「蘭学」の弊害が述べられている。

人の恐懼る、やうなる事を憚る所もなくいひもてはやすは皆かの蘭学者流の癖にて、「」巴が西洋の事に委曲おのきを誇り且彼方を主張して人を嚇すひが心得なるを、「」奇を好む八世人の習なれば聞續ぎ語續ぎて何の辨へおのもなくいと囂々しく唱ふめり

本書を出版した翁満の意図は、「西洋」が世に信用され、かつ強力と見做されていることを逆利用し、「西洋人ケンペル」による「蘭書」を根拠として、「西洋風」によって乱され損なわれた「和魂」の回復と確立することにあつた。そしてこの論理の立て方は、平田篤胤(一七七六〜一八四三)が『古道大意』(一八一一成、一八二四刊)の中で行った方法を、平田派の「国学者」が踏襲したものであった。いずれにせよ、前世紀と異なり、この時期の「蘭学」が世間の一定の評価を得ていたことは翁満の言に示されている。

無論、一九世紀においても中津藩医村上玄水(一七八一〜一八四三)や京都の医師吉雄元吉のように、西洋の学問を分析消化し、中国の知識や自己の検証に基づきながら自らの学問を構築した「蘭学者」も存在したが、しかしながら、一方では奥平昌高に見えるように「崇拜」とも言えるような受容態度が出現し、他方ではそのような「蘭学」に対する攻撃も登場し、さらには「蘭書」を逆利用する陣営も現れた。

前述した「仏僧」釈円通や平田派「国学者」は、「蘭学」を「解体」しながら批判的に自身の学問で活用した。ことに平田篤胤に至っては、記紀や本居宣長(一七三〇〜一八〇一)『古事記伝』(一七九〇〜一八二三刊)、服部中

庸（一七五七―一八二七）『三大考』（一七九一―一八〇一）などの「国学書」に加え、旧約聖書やマテオ・リッチ（利瑪竇、Matteo Ricci 1552-1610）『天主実義』（一六〇三刊）などのキリスト教関連書も利用しながら、天地の生成、宇宙、死後の世界などに関する論を展開した。⁴⁴

一部の「仏教者」や「国学者」が積極的に「蘭学」に取り組んだ、一見学問方法やアイデンティティと矛盾するように見えるかかる営為は、つまるところ、「学問」「学派」における問題設定の仕方とその解決方法の問題として理解できる。釈円通や平田篤胤は、「蘭学」を乗り越えるべき壁と認識しながらも、「仏教」や「国学」の枠組みの中で十分に馴化させようと判断したに違いない。

いずれにせよ、彼らは自身の学問をさらに裏打ちするために、「蘭学」を批判的に取り込み、活用するという学問方法を創出した。⁴⁵ そしてかかる処理をされた、或いは処理しうる「蘭学」が、「仏教天文学派」や「平田派国学」の学問体系において習得すべき学問（方法）の一つとなり、踏襲、共有されたのである。屈折した形ではあるが、これはむしろ「蘭学」の多様な受容相と浸透具合を物語る事例と捉えるべきである。

五 オリエンタリズムとしての「蘭学」

前述の中津藩主奥平昌高の営為に、西洋が〈文明的〉〈先進的〉で、東洋が〈未開〉〈後進的〉とするオリエンタリズムの眼差しが萌芽が見て取れたが、それは明治に入るとさらに顕著になる。

新政府の神祇制度確立に奔走し、また、明治天皇の侍講や宮内省歌道文学御用掛を務めた福羽美静（一八三二―一九〇七）は、『文明開化真面目』（一八七四）の中で、西洋の制度文物と明治日本の在り方を以下のように論じている。

夫世界は国おほし。多き中も文明国開化の域とよばるゝは、欧羅巴洲、米利堅洲中名高き英と仏、北阿米利加合衆国。夫等の制度文物は今時世界に冠たるもの。今や皇国の人民も東にはしり西はゆき、其文明の国々の開化の道をわが国うつつして国のたふとさを添ふるハ、実愛国の至情赤心、これをこそ育て、国報ずるの人のまこと、いふべけれ⁴⁶

「神道」「国学」界の有力者であった福羽が、欧米の文明を「開化の域」で「今時世界に冠たるもの」と見ており、それらを取り入れて国を發展させることが、「実愛国の至情赤心」だと述べている。ここで福羽は「文明の国々の開化の道」の必要性を深刻に認識しており、もはや西洋は、「神道者」「国学者」をして、「排斥すべき対象」ではなく、公然と「学ぶべき手本」と言わしめる対象に変化している。

ところで、明治二年（一八六九）、啓蒙思想家福沢諭吉（一八三五―一九〇二）は、神田孝平（一八三〇―一八九八）が露店で入手した写本を翻刻上梓した。その写本とは、杉田玄白による最晩年の回想録「蘭東事始」（一八一五成）で、出版にあたって「蘭東」は「蘭学」と変更され、「蘭学事始」という書名で刊行された。ただし、普及したのは、明治三年（一八九〇）、第一回日本医学会総会に合わせて活字印刷された再版であった。そしてこの再版には、福沢の〈感動的〉な序が仕掛けられていることに留意せねばならない。⁴⁷

数千部の再版書を普く天下の有志者に分布するは即ち蘭学事始の万歳にして、啻に先人の功勞を日本国中に發揚するのみならず、「東洋の一国たる大日本の百数十年前学者社会には既に西洋文明の胚胎するものあり」、「今日の進歩偶然に非ずとの事実を世界万国の人に示すに足る可し」⁴⁸

ここから福沢の出版の意図が、単に先人の〈先進的〉な功績の賛美と周知にとどまらず、明治日本の「進歩」の理由を説明することであったことが分かる。すなわち同様に西洋文明を〈鎖し〉ていた東洋諸国と日本との差異を、「蘭学」の存在に求めているのである。

この発想は、第二(のち第一) 高等学校教授齋藤阿具(一八六八—一九四二)の代表作『西力東侵史』(一九〇二)にも見られる。本書は、日本を含めた東洋に対する西洋の侵出とその後の東洋諸国についての研究書である。

齋藤は、いわゆる「鎖国」期の日本がオランダと交流していたことで、海外事情に通じることができ、「開国後も其文明を吸収すること甚だ困難ならざるを得たりしなり」と論じ、その一方で、「鎖国」を頑なに固守したときされる明・清朝の中国は、西洋文明に対して「開国」を果たした後、西洋諸国および日本に連戦連敗し、遂に「全身既に糜爛して」[支那国の将来は寒心に勝へざる]状態に成り下がったと評する。

つまり齋藤は、「文明化」した日本と植民地化された清朝との差異を、「鎖国」の中でも西洋事情に少し通じていた日本と、他方、完全に国を「鎖し」ていた清朝との差異に見出したのである。それは上記福沢の眼差しと同様のものである。

史論書のみならず歴史教科書のレヴェルでも「蘭学(者)」についての記述が登場する。『言海』の編纂で周知される大槻文彦(一八四七—一九二八)は、「交流」を編集方針の主眼とした『日本小史』(一八八二)を著した。本書はいわゆる明治検定期の代表的な歴史教科書であった。その校正再版(一八八七)の一節「蘭学及び海防ノ説起ル」において、大槻は「蘭学」を「後来、日本開化ノ道実ニ此ニ基セリ」と位置づけている。

他方、文部省によって編纂された第一期国定歴史教科書『小学日本歴史』(一九〇四)では、「外国の事情にうとくなりて、世界の進歩におくれ」る要因となった政策下の近世日本にあって、「蘭学者」は「わづかに、海外の事情に通じた(先進的)な人々と評価されている。福沢や齋藤のように東洋諸国と日本との差異化を明確に打ち出した記述ではなかったが、『小学日本歴史』における評価は、以降の国定教科書においても継承され、歴史教科の義務教育化(一九〇七)を起点として、爾後、「国民」に徐々に浸透していったと考えられる。

おわりに

以上、いささか乱暴ながら、実験的に一七世紀から二〇世紀までの「蘭学」(史)の展望を描いてみせた。近世の「蘭学」は、各分野で、或いは同一分野でも各時代において、その受容の在り方は様々であり、また、範疇の広がりや浸透、展開する過程も単一的な「発達史観」では説明しきれない様相であった。

しかしここで改めて強調したいのは、本稿の狙いが、近世における「蘭学」の多様性と変遷の実態解明ではなく、むしろ板沢武雄の議論を契機としながらそれらを「確認」することで、近代に形成された言説を浮き彫りにすることであったことである。かかる意味合いにおいて、この作業は、現今の「蘭学」「洋学」研究に内在した眼差し(言説)を「解体」し、新しい歴史像を切り開くための「腑分け」であった。

西洋的な(近代)を志向した明治維新以降において、「蘭学(者)」は「日本の近代化成功」の根拠(表象)とされた。史論書や教科書の中で「蘭学(者)」は、上述したような実情は忠実に反映されず、とりわけその(先進性)のみが特化され、それが前面に押し出される形で描かれた。加えて、「世界から隔絶した江戸時代」における唯一の世界との繋がりと位置づけられ、さらにはそこに植民地化された東洋諸国と(近代化)に成功した日本との差異を求める見解までも現れた。

かかる文脈で、板沢武雄の眼差しは、まさしく(近代)日本の視線そのものであり、驚くべきことに現在の「蘭学」「洋学」研究もまた、多かれ少なかれ(近代)の枠組みから脱出したものではない。かかる眼差し(言説)をもつて描かれる(正しい過去の実情)とは一体いかなるものであるのか。

このことは、歴史家の「歴史性」を問うとともに、もはや「近世」史研究が、「近世」の実態解明と併せて「近代」

言説の追究までも射程に入れなければならない地点にきているということ⁽⁵⁶⁾を、私たちに突きつけている。

注

- (1) 拙著「鎖国」という言説―ケンペル著・志筑忠雄訳「鎖国論」の受容史―(ミネルヴァ書房、二〇〇九年)。拙稿「開国」概念の検討―言説論の視座から―『国文研究』第五五号、二〇一〇年。これらの仕事によって、「鎖国」、「開国」を近代以降に形成された言説と捉えその受容史を追究する研究視座が確立された。
- (2) この点については、既に前掲「鎖国」という言説の「結語」において指摘した(二一九頁)。
- (3) 板沢武雄「蘭学の発達」国史研究会編輯(岩波講座日本歴史)(岩波書店、一九三三年)、三頁。なお、底本が活字出版物の場合、原則的に旧字は現在通用する字体に改めた。以下同。
- (4) 前掲「蘭学の発達」、三―五頁。
- (5) 前掲「蘭学の発達」、三、五―七頁。
- (6) 前掲「蘭学の発達」、七頁。
- (7) 前掲「蘭学の発達」、四、七頁。
- (8) 前掲「蘭学の発達」、七―八頁。
- (9) 前掲「蘭学の発達」、七四―七七頁。本文で述べた三分野に関係する学問として、オランダ語学は勿論として、その他、植物学、動物学、鉱物学、物理学、化学、歴史、数学、測量学、地図学、地理学、砲術、航海術、造船術などが挙げられている。
- (10) 前掲「蘭学の発達」、八三―八四頁。
- (11) ただし、一六六〇―八〇年代に、長崎でいわゆる「紅毛流外科」を修得した事例として、平戸藩医嵐山甫安、岩国藩医朝枝喜兵衛、宇佐出身の医師平田長太夫、久留米藩出身の医師太田黒(溝上)玄淡、白杵藩医江藤幸庵、福岡藩医原三信(六代)といった「長崎外」の人物も指摘されている。ヴォルフガング・ミヒエル「平田長太夫の阿蘭陀流外科修行証書とその背景について」同・吉田洋一・大島明秀編『中津市歴史民俗資料館 分館医家史料館叢書』第一〇巻(中津市教育委員会、二〇一一年)所収。
- (12) 名は玄松、元升。字は素栢、以順。号は観水子、拾棄奴、靈蘭など。

- (13) 盧千里「先民伝」(二巻二冊、慶元堂和泉屋庄次郎梓、一八一九刊)巻之下、一七丁裏。
- (14) 平岡隆二「沢野忠庵・向井元升・西玄甫・南蛮と紅毛のはざま」ヴォルフガング・ミヒエル・鳥井裕美子・川島真人共編『九州の蘭学―越境と交流―』(思文閣、二〇〇九年)所収、六―八頁。なお、「医門関」については言及されていないが、九州大学附属図書館医学分館に所蔵されている写本は、寛文八年(一六六八)序、向井玄升説、男・玄淡記編。
- (15) ヴォルフガング・ミヒエル「初期紅毛流外科と儒医向井元升について」『日本医学史雑誌』第五六巻三号、二〇一〇年、二六九頁。ミヒエルによれば、井上筑後守が積極的に医学の導入を行った背景には、政治上の戦略的な理由のみでなく、痔、膀胱結石ならびにカタルを患っていたという個人的な動機もあった。
- (16) 前掲「初期紅毛流外科と儒医向井元升について」。なお、ハンケについては、同「出島蘭館医ハンス・ユリアーン・ハンケについて」『言語文化論究』第七号、一九九六年、など参照。
- (17) 「乾坤弁説」の底本は、必ずしも最良ではないが便宜上『文明源流叢書』を用いた。沢野忠庵編述、向井元升考議「乾坤弁説」序『文明源流叢書』第二(国書刊行会、一九一四年)所収、三頁。なお、「乾坤弁説」の成立経緯を述べると、そもそも寛永二〇年(一六四三)に捕縛された切支丹伴天連の長老が西洋天文学書を所有しており、井上筑後守がその翻訳を忠庵に命じ、ローマ字表記で和訳した。そして忠庵の死後、長崎奉行甲斐庄正述が和訳を命じ、通詞西吉兵衛がローマ字を読み上げ、元升が筆録し、弁説(注解)を付して明暦二年(一六五六)に成立した。前掲平岡隆二「沢野忠庵・向井元升・西玄甫・南蛮と紅毛のはざま」、七―八頁。また、現存する「乾坤弁説」諸写本の書誌については、同「乾坤弁説」諸写本の研究「長崎歴史文化博物館 研究紀要」第一巻、二〇〇六年、同「南蛮系宇宙論の原典的研究」(花書院、二〇一三年)第五章に詳しい。
- (18) 「乾坤弁説」の別序として付された「四国学例」(一六五〇成)において、元升は理気二元説ならびに陰陽五行説の観点から西洋の四元素説を批判し、その性質は「凡鄙俗義」で「邪見偏僻」……「異端妖術」であると非難している。前掲「乾坤弁説」、六―七頁。
- (19) 元升の姿勢は「是に於て南蛮学士忠庵が編集する天地万物の説を取りて、是非を論じ、邪正を明らかにむ」という言辭にも窺える。前掲「乾坤弁説」、六―八頁。
- (20) ヴォルフガング・ミヒエル「由里安牟相伝」成立時の日蘭交流(記念シンポジウム「蘭学の来た道」、ハンドアウト資料、二〇〇四年)。
- (21) その他の事例として、近年ミヒエルが詳細を解明した、一六六〇年代における幕府による「葉草政策」を挙げることができる。

幕府は様々な理由で、薬草の供給を輸入に頼る状態から脱するために国内資源の開発に目を向け、専門家の派遣をオランダ人に依頼した。来日した薬剤師ゴットフリード・ヘック (Godfried Haeck) とフランツ・ブラウン (Franz Braun) は、薬草の栽培法、利用法、ならびに薬油の蒸留法について教授し、長崎奉行の要請で長崎周辺の薬草調査を行った。かかる取り組みは、(それまで依存していた) 中国本草学や西洋本草学を脱却しながら主体的に取り入れようとした事例と言え、それは日本独自の本草学の誕生を意味した。ヴォルフガング・ミヒエル「薬剤師ゴットフリード・ヘックによる長崎郊外の薬草調査について」『言語文化論究』第二号、二〇〇六年。

- (22) 寛永一六年(一六三九)までに、キリスト教徒の弾圧、南蛮人の追放、南蛮人の来航禁止、日本人の出国禁止、在外日本人の帰国禁止、外交の制限、交易の制限などの方針が、長崎奉行に対する下知などによって示された。このような背景から、国際関係の対象国は、徐々に琉球王国、朝鮮王国、中国、オランダ(およびアイヌ)に絞られ、慣習(法)的にそれ以外の国とは関係を持たないこととなった。山本博文「鎖国と海禁の時代」(校倉書房、一九九五年)。前掲拙著「鎖国」という言説、三頁。ただし、この国際関係を自覚的に意識したのは一九世紀初頭であった。その背景は、露米会社社長でロシアの遣日使節ニコライ・ペトロヴィッチ・レザノフ (Nikolai Petrovich Resanov, 1764-1807) が通商を要求するために来航したことにより、幕閣の中で危機感が高まったことにある。藤田寛「鎖国祖法親の成立過程」渡辺信夫編『近世日本の民衆文化と政治』(河出書房新社、一九九二年)所収。

- (23) 勝山脩「調馬師ケイゼル」『洋学』第六号、一九九八年、六八―七〇頁。今村源右衛門の生涯については、今村英明「今村英生伝」(ブックコム、二〇一〇年)。

- (24) 岸田知子「漢学と洋学 伝統と新知識のはざままで」(大阪大学出版会、二〇一〇年)、一一―一三頁。

- (25) この見解は、自身の営為を「蘭学」の嚆矢として位置づけた杉田玄白による最晩年の回想録「蘭東事始」(二八一―五成)の記述が出所となっていると思われる。本書の普及の経緯については、本稿第五章参照。

- (26) 「解体新書」刻解体新書序(洋学 下) 日本思想大系六五(岩波書店、一九七二年校注版) 所収、二〇八―二二一、三一九―三三〇頁。

- (27) 筆者が「蘭学階梯」に着目した契機は、前掲岸田知子「漢学と洋学」第二章第三節「漢学の足かせ―華夷思想・『聖賢の学』との闘い」(六一―一二頁)に拠るところが大きい。

- (28) 「蘭学階梯」叙(洋学 上) 日本思想大系六四(岩波書店、一九七六年校注版) 所収、三二八―三二九頁。

- (29) 鳩谷は「蘭学」が「利用厚生」に秀でた学問であることを説いている。「蘭学階梯」題蘭学階梯首、三一九―三二五頁。
- (30) 一七五一年誕生説もある。
- (31) 「蘭学階梯」跋、三七―三三二頁。前掲岸田知子「漢学と洋学」、一一〇―一二頁。
- (32) 渡辺敏夫「近世日本文学史」上(恒星社厚生閣、一九八六年)、一八九―二二七頁。
- (33) 拙稿「異人恐怖伝」に見られる国学者黒沢翁満の「鎖国論」受容『日本文芸研究』第五六卷二号、二〇〇四年、同「一九世紀国学者における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容と平田国学」『日本文芸研究』第五七卷一号、二〇〇五年、同「近世後期日本における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容」『洋学』第一四号、二〇〇六年、同「志筑忠雄訳『鎖国論』の誕生とその受容」『蘭学のフロンティア―志筑忠雄の世界』(長崎文献社、二〇〇八年)所収など参照。なお、「鎖国論」訳出にあたって志筑忠雄が底本としたのは、『The History of Japan, 1727. (日本誌)』のオランダ語第二版 *De beschryving van Japan, 1733.* の附録第六編の最終第六章。前掲拙著「鎖国」という言説、七八頁。

- (34) 「漂流紀事」については、平田守衛編著『黒田麴廬と『漂流紀事』』(京都大学学術出版、一九九〇年)などの研究書がある。
- (35) 永積洋子研究代表「18世紀の蘭書注文とその流布」(科学研究費補助金基盤研究「B」)[2] 成果報告書、一九九八年)など参照。
- (36) 前掲拙著「鎖国」という言説、二一九頁。
- (37) 筆者が奥平昌高に着目した契機は、ヴォルフガング・ミヒエル「中津藩主奥平昌高と西洋人との交流について」同編「中津市歴史民俗資料館 分館村上医家史料館資料叢書」第五卷(二〇〇六年)所収に拠るところが大きい。
- (38) 前掲「中津藩主奥平昌高と西洋人との交流について」、二二―三三頁。
- (39) 「仏国曆象編」五巻五冊の中で、とりわけ西洋に対する批判が見られるのは、巻之二の一節「西洋新説」である。拙稿「佛國曆象編」ヴォルフガング・ミヒエル編「中津市歴史民俗資料館 分館村上医家史料館資料叢書」第一巻(二〇〇三年)所収。

- (40) 「刻異人恐怖伝論」(個人蔵)、一二丁裏。なお、ルビヤ表記は底本に従った。また、「蘭辭」という歴史用語を批判的に検討する文脈ではあるが、この記述に始めて着目したのは、前掲ヴォルフガング・ミヒエル「中津藩主奥平昌高と西洋人との交流について」、二二頁。
- (41) 前掲拙稿「異人恐怖伝」に見られる国学者黒沢翁満の「鎖国論」受容、前掲拙著「鎖国」という言説」第三章第一節。
- (42) 前掲拙稿「十九世紀国学者における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容と平田国学」前掲拙著「鎖国」という言説」第三章第二節。
- (43) 志筑忠雄訳「曆象新書」(二八〇二成)によって誕生した「引力」、「遠心力」、「求心力」などの用語を、村上玄水はその著述「天

地分体論」において、人体を構成する諸要素に位置づけている。拙稿「村上玄水著『天地分体論』とその背景」ヴォルフガング・ミヒェル・吉田洋一・大島明秀編『中津市歴史民俗資料館分館医家史料館叢書』第八卷（中津市教育委員会、二〇〇九年）所収。同様に、吉雄元吉も西洋医学を摂取しながらも漢方の知識を軽視することなく、情報を比較しながら薬の試用を行ったり、自ら新薬を開発したりした。ヴォルフガング・ミヒェル「吉雄元吉―忘れられた蘭学者の生涯と著作について―」『言語文化論究』第二三号、二〇〇八年。

(44) 村岡典嗣「平田篤胤の神学に於ける耶蘇教の影響」（一九二〇年稿）村岡典嗣著・前田勉編『新編日本思想史研究』（平凡社、二〇〇四年）所収、および遠藤潤「平田国学と近世社会」（ベリかん社、二〇〇八年）第一章～第四章参照。なお、篤胤が利用した『三大考』の世界像は、西洋天文学の知識と『古事記伝』の記述を整合させて成立した。前掲遠藤潤「平田国学と近世社会」、三一―三五頁。

(45) 例えば、本居宣長の学問が古義学や古文辞学に多大な影響を受けていることは周知のとおりである。また、朱子学や仏教などの思想（学問）史を見ても分かるように、他領域、他学派の方法論や論理を取り込むことは、「学問」として一般的な営為であった。したがって、これまでしばしば見られた、「国学」と「蘭学」の思想的対立の構図を思い描きながら「国学者が蘭学に取り組んだこと」自体に面白さや価値を見出すような研究視点は、上記の意味合いにおいてそれほど生産的ではないと思われる。むしろ、「蘭学」を取り込み変質した「国学」が、以前とは異なる新たな影響を、どのようにして、どの程度社会に与えたのかという問題の方が遥かに重大である。なお、かかる問題意識を一部に含んで前掲拙著『鎖国』という言説（第三章 近世後期日本における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容）は成された。

(46) 福羽美静「文明開化真面目」（登山塾、一八七四年、一丁表～三丁表。なお、旧字は新字に改め、ルビは省略した。）

(47) 福沢は、あまりの感激で涙無くして通読できない旨を訴えかけている。『蘭学事始』（林茂香、一八九〇年活字再版）、福沢序二頁。ヴォルフガング・ミヒェル氏の御教示による。

(48) 前掲『蘭学事始』（一八九〇年活字再版）、福沢序四頁。

(49) 斎藤阿具『西力東侵史』（金港堂、一九〇二年）、一八〇頁。

(50) 前掲『西力東侵史』、一〇五頁。

(51) このことを初めて指摘したのは、拙著『鎖国』という言説、一七七～一七八頁。

(52) 『所収教科書解題 校正日本小史』『日本教科書大系』第一八卷（講談社、一九六三年）所収、七三二頁。

(53) 大槻文彦『校正日本小史』卷之下、前掲『日本教科書大系』第一八卷所収、七〇七頁。

(54) 文部省『小学日本歴史』二、『日本教科書大系』第一九卷（講談社、一九六三年）所収、四八〇頁。

(55) 前掲『小学日本歴史』二、四八四頁。

(56) この点については、前掲拙稿「近世後期日本における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容」、同『開国』概念の検討―言説論の視座から―、ならびに前掲拙著『鎖国』という言説において既に提示した。なお、近年の研究動向において、「近代」に対する批判的反動から、「近世」社会の「固有性」、「成熟度」或いは「到達点」という視点に立ち、とりわけその見直し、肯定的な評価を押し進める論考がしばしば見受けられる。しかしながら、「近世」の再評価は、なぜそのような「近世」を捨てて「近代」を選んだのかという問いに対する応答と併せて慎重に行わなければならないと筆者は考えている。というのは、生国の過去を肯定する発想の根底には、とすると、背後に「時代性」に規定された偏狭なナショナリズムが所在している危険性があるからである。

【付記】 本稿は二〇一一年三月に脱稿したものである。

濱口 裕介 (はまぐち ゆうすけ) 一九八〇年生まれ 札幌大学女子短期大学部助教

立教大学大学院文学研究科史学専攻博士課程前期課程修了 共著：『城下町と日本人の心性』(岩田書院、二〇一六年)、
『藩物語 松前藩』(現代書館、二〇一六年)

福田 舞子 (ふくだ まいこ) 一九八三年生まれ 大阪大学適塾記念センター特任研究員

鶴見大学大学院文学研究科博士前期課程修了 論文：『幕府による硝石の統制―軍制改革と座・会所の設立―』『科学史研究』第Ⅱ期 五〇巻 (No.258) 二〇一二年、『幕府歩兵の創設とその展開―西洋式軍制導入の一過程―』『一滴』第Ⅱ〇号、
二〇一二年

上白石 実 (かみしらいし みのもる) 一九六四年生まれ 盛岡大学文学部准教授

立教大学大学院文学研究科中途退学・博士(文学) 著書：『幕末の海防戦略』(吉川弘文館、二〇一一年)、『幕末期対
外関係の研究』(吉川弘文館、二〇一一年)

安田 千恵美 (やすだ ちえみ) 一九八四年生まれ 立教大学大学院文学研究科博士課程後期課程在学中

立教大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了 論文：『女今川』成立考』『史苑』七三巻一号、二〇一三年、『女子
用往来にみる近世女性の「源氏物語」受容』『立教大学日本学研究所年報』九、二〇一二年

秋山 伸一 (あきやま しんいち) 一九六一年生まれ 豊島区立郷土資料館学芸員

立教大学大学院文学研究科史学専攻博士課程前期課程修了 論文：『江戸北郊における植木屋の庭空間―伊藤伊兵衛家
『武江染井翻紅軒霧島之図』の検証』菊池勇夫編著『地方史・民衆史の継承』(芙蓉書房出版、二〇一三年)、『武江染
井翻紅軒霧島之図』の成立年代について―朝鮮人参の試作と普及をめぐる―』『豊島区立郷土資料館研究紀要 生活
と文化』第二三号、豊島区、二〇一四年

近世日本の国際関係と言説

平成 29 年 4 月 1 日 発行

編者 荒野泰典

発行所 株式会社 溪水社
広島市中区小町 1-4 (〒730-0041)
電話 (082) 246-7909
FAX (082) 246-7876
e-mail : info@keisui.co.jp
URL : www.keisui.co.jp

印刷・製本 シナノパブリッシングプレス

落丁・乱丁はお取替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-86327-384-9 C3021